

FREEDのデザイン

Style and Design of FREED

大橋 昭彦*
Akihiko OHHASHI
服部 明洋*
Akihiro HATTORI

小池 欧介*
Ohsuke KOIKE
橋本 栄子*
Eiko HASHIMOTO

要 旨

FREED は、「Free Life Creation」というコンセプトのもと、都市部での使い勝手と廉価であることを考慮しながら、コンパクトなサイズの中に、5ナンバーユーティリティーミニバンの空間と乗用ミニバンのスタイリングを高次元で両立させた。いわば世界最小本格ミニバンとして開発した。

その中でエクステリアデザインは、STEPWGNのようなユーティリティーミニバンの骨格と、STREAMのような乗用ミニバンの骨格を融合した「トライアングル・スクエア・フォルム」を「カービング・アート・サーフェース」で包むことにより、躍動感のあるフォルムを実現させた。

インテリアデザインでは、「心地よさ」「使いやすさ」「広さ」をテーマに、レイアウト以上の広さが感じられるよう各所に視覚的工夫を取り入れた造形をした。その結果、車内にいながら「オープンカフェ」のような爽快で、楽しく、気持ちの良い空間を実現した。

ABSTRACT

Developed in pursuit of “Free life creation”, the FREED might be described as the world’s smallest full-scale minivan. While keeping the vehicle both convenient for city drivers and relatively affordable, we have succeeded in combining the roominess of larger utility minivans with the styling of sporty wagons.

The dynamic exterior fuses the frames of a utility minivan (such as the STEPWGN) and a multi-passenger vehicle (such as the STREAM) in a shape combining a triangle and square enveloped in graceful curving surfaces.

Inside, visual cues around the cabin create the illusion of greater space affording a sense of comfort, convenience, and expansiveness. The stimulating ambiance of an open-air café is captured in an enclosed space for a pleasant and enjoyable interior environment.

1. はじめに

MOBILIO は 4.07m という短い全長の中に、3列シートミニバン価値を取り入れた車であった。

コンセプトはもちろん技術的にもデザインの的にも革新的で、2001年のデビュー後、競合各社から後続車が次々と現れた。

しかし、全長の短さにこだわったことで、ミニバンとしての広さが十分でなかったため、ユーザにコンパクトミニバンの良さを伝えきれなかった。

そこで、コンパクトサイズの中に大人(身長約 185cm)が3列それぞれに座ることのできる、最小の本格ミニバンを創るという発想が生まれた(Fig. 1)。

*四輪開発センター

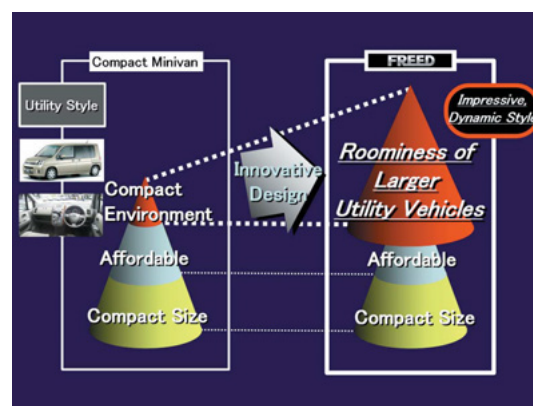


Fig. 1 Approach to development

Fig. 2 に FREED の開発コンセプトとデザインを示す。

世の中のコンパクトミニバンは、そのサイズから扱いやすさ、経済性はもちろん、7人乗れることや多彩なシートアレンジなど、小さなサイズの中で広さや使い勝手を特徴としていた。

しかし、グループインタビューなどの調査をおこなうと、実際に7人乗ると窮屈だったり、いくつものシートアレンジは使われていなかったり、買った人たちの期待に答えているとはいえなかった。そのため、もう一度原点に戻ってコンパクトミニバンの価値とは何かを見つめ直し、広さと利便性をコンパクトサイズの中で徹底的に高めることに目標を定めた。

コンパクトなボデーサイズの中で大人が7人乗れて、しかも快適であること、どのドアから乗っても、自由にどの席にも行けるフリーウォークスルーを実現すること、これらを要件として開発を進めた。



Fig. 2 Development concept

2. パッケージレイアウト

コンパクトなボデーサイズの中にミニバンの本質である広さと利便性を最大限に構築するため、新設計の低床フラットフロアを採用した(Fig. 3)。

また、薄型の燃料タンクなどの採用により、小さな子供が1人で乗り降りできる地上高を実現すると共に、ゆとりの7人乗りキャブテンシートによるフリーウォークスルーを可能とした。

さらにフロント足元フロアを一段下げる工夫により、1列目から3列目までのエレベーションを十分なものとした結果、どの席に座っても見晴らしが良く心地良い開放感を実現した。

街中での取り廻しやすさを向上させるため、死角を減らしたフロントピラー、前下がりのサイドウィンドウ、中央が絞られたリヤピラー、中央下端を下げたリヤウィンドウ形状などの採用で、誰でも安心して運転できる見晴らしの良い視界にもこだわった(Fig. 4)。



Fig. 3 Approach to vehicle package

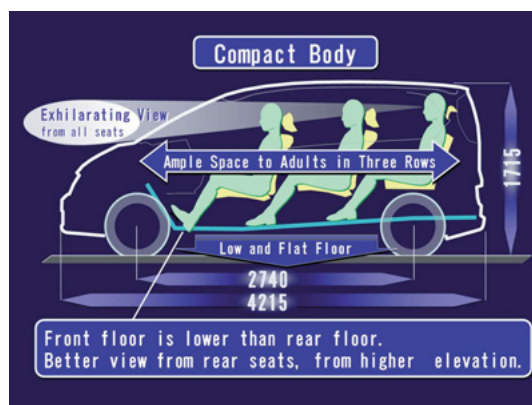


Fig. 4 Vehicle package highlights

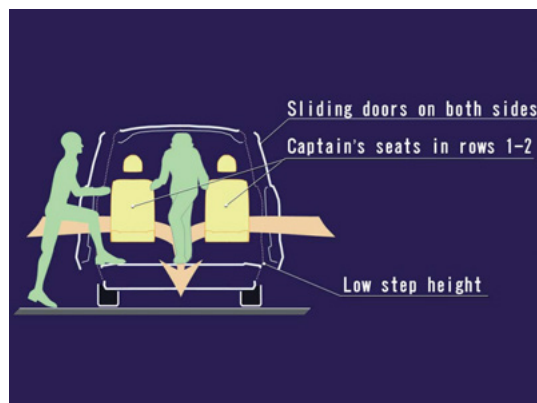


Fig. 5 (a) Easily access to rows 1-3



Fig. 5 (b) Cargo area accommodates bicycles

ミニバンにかかせない荷室のユーティリティも万全とし、日常の買い物から自転車まで楽々載せられるスペースとパーサティリティを備え、低床と十分な開口高さなど、積載性にも配慮し優れた使い勝手を実現した [Fig. 5 (a), (b)]。

3. エクステリアデザイン

「Free Life Creation」を具現化するために、いままでのコンパクトミニバンには無い、新しい骨格を創り上げることを目指した。

シート1列目より前は乗用ミニバンをイメージさせるトライアングル骨格、2列目以降は居住スペースと荷室ユーティリティを高めるためのスクエア骨格とし、この二つの骨格を融合させた「トライアングル・スクエア・フォルム」を基本モチーフとした (Fig. 6)。

この斬新な骨格「トライアングル・スクエア・フォルム」

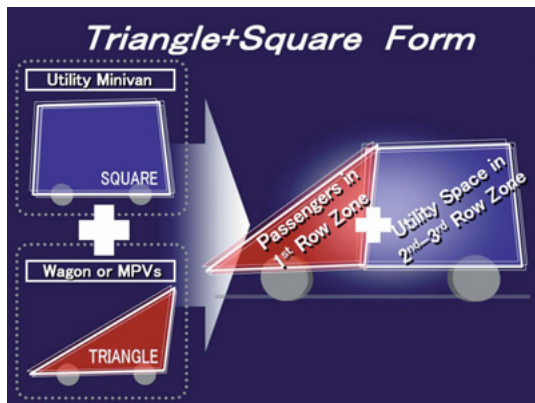


Fig. 6 Exterior design highlights (1)



Fig. 7 Final rendering



Fig. 8 Final rendering

をベースにして、より車に動きを与えるために、有機的でダイナミックな「カービング・アート・サーフェース」で全体を包むことにより、止まっているときでさえ走る姿が見えるような一塊のダイナミックなデザインとした。ボデーに刻み込まれたシャープなラインと、そのラインを浮き彫りにする豊かな面の表情は他のどのクルマにも似ていない個性となっている。

緻密に刻み込まれたキャラクターラインは、面からスッと現れて、いったん深くなり徐々に浅くなって、やがてまた面へと溶け込む。さながら彫刻のような陰影のグラデーションを生み出し、デザインチームが「官能パネル」と呼んで造り込んだ曲面は、実際に触れれば誰もが感じ取れる豊かさ、手込み感を備えている (Fig. 7, 8)。

車の動性能と安心感という本質をコンパクトなボデーに凝縮させながら、洗練された街にあって埋もれることのないエモーショナルなスタイリングを創り出した (Fig. 9)。

Fig. 10, 11 に最終エクステリアデザインを示す。



Fig. 9 Exterior design highlights (2)



Fig. 10 Final exterior



Fig. 11 Final exterior

4. インテリアデザイン

インテリアデザインでは、さまざまな視覚的工夫などにより、寸法以上の広さを感じさせる爽快空間に使いやすさを融合し、車内にいながら楽しく、爽快で、気持ちの良い「オープンカフェ・インテリア」をコンセプトとした(Fig. 12)。

インストルメントパネルでは、アッパー部は人を包み込むラウンドとし、ロア部は広さを感じさせるようにアッパーとは逆ラウンドの造形とし、視覚的に気持ちの良い広がりを持たせる造形とした。操作系ではオーディオ系とヒーターコントロール系とを上下に明確にゾーン分けをおこなうことで、わかりやすさと使いやすさを実現した。

またメータは瞬間認知しやすく、視線移動が少ないアウトホイールメータを採用することで、視認性とドライバ周りの広さ感を実現した(Fig. 13)。

ドアライニングはインストルメントパネルから繋がる前部と、アームレストや大型ロアポケットなどの人が触れる

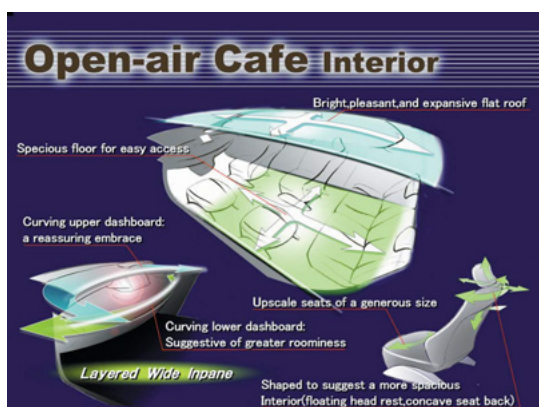


Fig. 12 Approach to interior design



Fig. 13 Instrument panel



Fig. 14 Door lining

後部を分割したデザインとすることで、広さ感の強調と機能のゾーン分けをハッキリさせるデザインとした(Fig. 14)。

シートは上位機種のフレームを採用することにより、一クラス上の座り心地を達成するとともに、フロントおよびセカンドのシートバック背面をそぎ落とすことで、乗員の膝周りの広さを確保し、さらにヘッドレストを浮かせるなど、室内をより広く感じさせる工夫を各所に入れ込んだデザインとした。

ユーティリティでは、使いやすいところにトレイ、カップホルダ、ポケットなどを設置し、特にカップホルダはカフェのテイクアウトカップなども対応するサイズとした。

また、フロントドアの大型ロアポケットには、折り畳み傘や小さなバッグも入るワイドタイプを採用した。

ルーフは極力凹凸を少なくし、各ウインドウからの光を取り入れやすい形状と明るいルーフ色を採用することで、ルーフ全体の明るさと楽しさ、広さ感を実現した。

5. カラーデザイン

5.1. エクステリア

外装色は、躍動感溢れるスタイリングをより引き立てることを一番に考え、ヨーロッパなどの洗練された街にあって埋もれることが無い上質感溢れる洗練されたラインナップとした(Fig. 15)。

明るい日差しの中にあっても、夜の街にあっても映える色としてテーマカラーを「プレミアム・ナイト・ブルー・パール」に設定した。ガラスフレークを配合することによって、豊かな煌きを放ち、一色の中にカラー変化を生む特徴がよりいっそう FREED の美しいボデーを引き立て、透明感のある輝きを演出している(Fig. 16)。

他のラインナップは、上質な中にも華やぎを感じるバスクレド、定番の黒ではなく、光の効果で紫色にも見えるブラキッシュパール、明るく瑞々しいルミナスブルーパール、ホワイトパール、ライトシルバーのアラバスターシルバーとガンメタルのポリッシュドメタルメタリックである。

著作権上の理由により非表示

Fig. 15 Exterior color options

5.2. インテリア

「お気に入りのカフェにいるような気持ちのいい空間」を創ることを目指し、ニュアンスのあるコーディネートとなるよう、ベーシックながらも微妙な色使い、シート表皮のレイヤード模様、ルーフ色など全体にわたりそのテイストを活かした(Fig. 17)。

内装カラー

ベース内装は、基本色はブラックとグレー、ピラーと天井はクールアイボリー、フロアはグレー、という構成とした。さらにドアライニングを縦基調のデザインを活かすために、リヤサイドライニングにかけて、ブラックとグレーを



Fig. 16 Inspirations for exterior colors



Fig. 17 Interior inspirations



Fig. 18 Coordinated interior color scheme

交互に配色した。こうすることで、フロントからリヤに続く広い室内にメリハリ感を出し、モダンな空間を演出している(Fig. 18)。

天井色

ルーフ色に新色の「フレンチクールアイボリー」を採用することで、外からの光をより一層明るく見せ、この明るさがさらに広さ感に繋がっている。

シートファブリック

ファブリック色は、クールアイボリーとブルーイッシュなブラックの2色とした。どちらも FREED の専用新色であるが、基本内装色が1色であるのに対して、シートカラーを2色持つことで、一方はフレンチカフェ、一方はナイトカフェという全く異なる世界を演出している。柄は、広さ感を感じるレイヤード模様とし、風合いのよいスエード調のトリコットを設定した。

6. まとめ

FREEDはコンパクトなサイズのなかに、広くて使いやすいという、かつてない本格ミニバン価値を創造した。乗る人が多くのストレスから解放され、自由に使える車であること、そしてお客様を魅了する先進スタイリング、上質な走行性能、コンパクトならではの扱いやすさと経済性など、商品魅力をより高めた。

「乗って、走って、降りるまで、乗る人すべてに快適で使い勝手に優れた空間であること」という Honda ミニバンの信条をコンパクトサイズの中ではじめて形にした。

小さなボデーにミニバンの魅力を凝縮した車、革新価値「世界最小本格ミニバン」の誕生である。

■ 著 者 ■



大橋 昭彦



小池 欧介



服部 明洋



橋本 栄子